

街の 灯り 物語

灯り——それは
そこに暮らしがある証
さまざまな心模様が描かれ
物語が紡がれている証
迎えてくれる灯り
見送ってくれる灯り
そして見守ってくれる灯り
街それぞれに灯りがあり
人それぞれに
心に残る灯りがある
その一つの物語

物語 街の灯り



はんなりと心華やぐ 祇園の灯り 井上八千代 京舞井上流五世家元



いのうえ やちよ 京舞井上流五世家元
京都府生まれ。ノートルダム女学院高卒。
祖母・四世井上八千代に師事、61年「七
福神」初舞台、70年井上流名取となる。
75年八坂女紅場学園教師、2000年京都
造形芸術大学教授、同年五世井上八千
代を襲名。京都市芸術新人賞、芸術選
奨文部大臣新人賞、京都府文化賞奨励
賞、芸術選奨文部大臣賞、日本芸術院賞
など。毎年4月1日から30日まで祇園歌舞
練場で開催される「都をどり」の総責任者。

はるのは、どれも光の演出を工夫したシーンです。
都をどりが、桜の開花とともに始まるのはありが
たいこと。舞台のあとは、夜桜を見ていただけます。
夜の桜も、近頃は上手にライトアップされて、一層
美しさを増すようです。舞台の華と都の花、両方見
ていただけるのが都をどりと自負いたしております。
しゅんとした、元気がない時代です。祇園の街も
一軒でも休んではる店があると、その角の灯りが消
えていて、暗くて寂しい。街々の灯りは、つながっ
てるほどこにええもんです。街の賑わいや、人々のさ
んざめき。今やからこそ、パツと気持ち華やぐも
の——京都で言う、「はんなり」したもんを感じて
もらいたい。いつまでも祇園の街の灯りが消えず、
明るく楽しくはんなりと、お客さまをお迎えできま
すことを願っております。

【要】

京 都・祇園の「都をどり」が始まる四月。
お茶屋の軒先に「つなぎだんご」——祇
園のしるしの赤い丸提灯が連なり、花見
小路を照らすと、なにかしら気持ちも華やぎ、花街
がいつそう浮き立った気分になります。
赤い紙を通して見る提灯の灯りは、じかの灯りと
はまた違う風情があるものです。東京の街で見る青
や白のイルミネーションは、それはもう美しいもん
ですけど、この街に似合うのはもっとやわらかい灯
り。祇園の赤壁に映る提灯の灯り、白障子越しのぼ
んぼりの光、お座敷の金屏風も灯りの具合でふわっ
とやさしい色を放ちます。雨の日も、濡れた舗道に
ぽーっと提灯の光が落ちて、なんともいえない風情
があります。
今はどこもあかあかと明るいけど、日本人には昔
から「陰翳礼讃」、暗がりに美を見出す心がありま
した。白塗りの舞妓さん、芸妓さんの姿も、薄暗が
りで見るところに美しさがあつたのかもしれない。
でも逆に、さまざまな照明の工夫ができるのも、
今の時代のええところ。舞踊の舞台は、それこそ光と
陰の演出なくして成り立ちません。明治五年から
百三十八年続く「都をどり」には型があつて、プロ
ローグから梅の場面に移り、夏、秋、冬と季節をめ
ぐり、エピソードともいえる春の桜で幕を閉じます。
桜に踊り手のシルエットが浮かび上がる場面や、大
文字に火が灯る場面。お客さまがわつと喜んでくれ